



保津川下り(京都府亀岡市～嵐山)

紫の大岩は、はやくも船頭の黒い頭を圧して突っ立った。
船頭は「うん」と舳に気合を入れた――。

明治40年、夏目漱石が職業作家として初めて執筆した「虞美人草」。

この作品の中で、保津川下りのその移ろいゆく情景や

瀬を下る舟頭の竿さばきが描かれています。

保津川下りは水流を利用して

下流へ物資を輸送するため

8世紀末に始まったとされています。

当時は上流の丹波から木材を

輸送することが主な目的で、巨岩やげんじの落差、

浅瀬などが随所にあるため、

筏でしか下ることができませんでした。

慶長11年に京都の豪商・角倉了以が

水路を開き、筏だけでなく搬送船も

通れるようになると

丹波の良質の米・麦・薪炭なども

輸送されるようになりました。

その後、電車や車など交通手段の発達で

筏や搬送船による水運利用が姿を消していくと

明治28年頃には遊船として観光客を乗せる

川下りが始まりました。

それから約100年。

全国に名を知られる舟下りとなった今では、

年間約30万人の観光客がそのスリルと

自然美を楽しんでいます。